

此千々輪より山に登る、道嶮敷水なくして誠に難所の山なりやうく、晝過るころに絶頂に登り付く、絶頂は平地にて、民家そここゝに見へ、田畠も多く、折しも稻心よく實り、其中に幅三間ばかりの川ながれたり、天外の一小世界にして、實に地上の仙境ともいふべし、向ふをはるかにみれば茅葺の佛院みへて、撞鐘の音幽に聞ゆ、此寺を一乘院といふ、むかし文武聖武兩朝の御歸依據りしに依て、公よりこぼち捨られ、今は纔に此一乘いんばかりこそ、むかしの佛を残せるとぞ、今之院主より六代前までは、京都より堂上家の公達を申下し、住持有けるよし、いかなる御家の公達にてかありけんか、る鄙のはてに來り給ふ、其名も聞まほし、一乘院を尋ねしに院主迎へ入れていろく、物語し、風雅の人、筆の跡のこしたまはれといふ、予も拙しと辭せしかど、強て求るにいなみがたくて、七言絶句一首を作りて與ふ、院主よろこび、晝飯など出してもてなす、それより沙彌案内して、地獄めぐりす、しやう熱地ごくあり、きやうくわん地獄あり、藍屋地ごくあり、餅や地獄あり、鍛冶や地獄あり、酒屋ちごくあり、其外かずくみなそれぐの模様ありて、多くは皆熱湯の池なり、其湯墨よりもくろく、雷のごとき音して湧上り、或は石ほどばしり、煙卷、炎燃て、其おそろしきこと書つくすべきにあらず、東國にては越中立山、津輕の焼山皆地ごくありといふ、此類なるべし、もしあやまちて落入りば、たちまち爛れ死すべし、久敷みるべき所にもあらず、十ヶ所計めぐりて、沙彌にわかれ下山す、眺望はいふもさらなり、此峯には瓊瑤躑躅といふものあり、見事なるものにて、珍敷ものなり、又大なる池あり、池の傍草うるはしく、駒多し、此牧ても年ごとに駒多く育といふ、かく高き山の絶頂に、廣き牧あるも奇妙の地なり、下りには東へ向ひ、島原の方に道す、城下まで下り坂五里なり、其道より天の四郎が籠りし原の城など見ゆる、今之城下よりは南の方にて、やはり此山の裾なり、東南の方に、海をへだて、程近く、天草の島なり、